

水面

岡本俊弥

地震の翌朝、起きてみると、町は深い色彩の中に沈んでいた。

はるか頭上で、日の光がゆらゆらと揺れている。ちようど2階建ての屋根のあたりが境界なのだろうか。あたりはふだんより薄暗く、青い光に満ちていた。

「あれはいったい何や」

近所の知り合いが不安そうに訊いてきた。

「水面やと思います」

隣の大学生が言った。

「ぼく、スキューバしてたんですけど、水の中に潜ると、水面がちようどあんな感じに見えよるんですよ。天井みたいでしょ」

「ええけど、どういふことかなあ。わしらは水の中におるつちゆうことかな」

「おかしいやろ。それやったら何で息ができるんや」

「そう見えるというだけで、溺れてるわけやないし」

「気のせいかな」

「いや、ここらへんみんなが同じなんやから、気のせいとはちやうやろ」

しばらく議論が続いたが、誰もが納得できる説明はなく、やがて全員が黙り込んだ。

商店街にある雑居ビルの一つが三階建て以上あった。入り口が開いており、何人が集まって最上階の窓から身を乗り出していた。

見渡す限り穏やかな水面が広がっている。西の彼方に島のようなものが霞み、東側を見ると山が迫っていた。

「海やな。潮の香りがする」

「どこの海やねん」

「東に見えるのは生駒山とちやうかな、山のかたちからすると」

「いや、なんか違う」

「何がや」

「アンテナがみえへん」

「ああ山の上か」

生駒の山頂には大阪や奈良側に向けたTV送信所があつて、たくさん電波塔が建つていた。それが一つも見えないのだ。山は急斜面なので、ふもとを除けばもともと住宅などあまりなかった。

「それやったら西のあの島は」

「分からんなあ、淡路島にしては近いしなあ」

「こんなビルより、高い建物がぎょうさんあるはずなのに、一つも見えへんのはどういうわけや」

「そもそも、なんで海やねん」

そこでの議論も長くは続かなかつた。いつまでも水面を眺めているわけにもいかず、集まった人々は何も分からないまま仕事にもどつていった。

異界の風景は三階より上だけで、二階からは見慣れた下町しか見えなかつた。通勤

につかう長い下り道や、混み合ったバス、鉄道の駅は、すべて水中に沈んだ世界だった。沈んでいるという以外、何も昨日と変わりはなかった。海底から見える生駒山には電波塔があり、TVはいつも通り放送されていた。

マスコミやネットのニュースは、異変の欠片も伝えず、昨日までと同じ政治や経済の話題を流すだけだった。東京ならともかく、ローカルニュースを伝える大阪の番組まで同じ調子なのだ。

坂を下り、駅の周辺では水面がほとんど見えない。遙か頭上なので、気がつかない人のほうが多いのだろう。出勤を急ぐ人々は、薄暗さを訝しく思う間もなく、急ぎ足で歩き過ぎていった。

翌朝も同じだった。

ビルの三階で開け放たれた窓に並び、数人の男女が声を上げて話していた。

窓の外は快晴だった。

「昨日あれから地図で調べたんやけどな」

町内で郷土史家を名乗る男がしゃべり出した。学者や教師ではない。会社を定年退

職した後、独学で研究をしているらしい。

「西に見えてるあれは、島とはちゃうな。たぶん岬や、あの方向は上町台地になるはずや」

聞いていた数人は顔を見合わせた。

「けど上町やったら、大阪城やビジネスパークがあるはずやろ。建物だらけで木なんか見えへんかったで。ところがあそこは緑一色や。生駒はともかく、上町に何にもないのはおかしいやないか」

「市街化の進んだ街やから、古い地形を想像するのは難しい。ビルが丘や山の高さ、谷の深さを覆い隠して、何もかも見えんようにしてしもうたからな」

郷土史家は、自慢げな調子で答えた。

「けど、そんなもんがなんにもなくなったら、こう見えるわけや」

まあそうかもしれへん、と数人は納得したような、だまされたような顔をした。

「わしは調べたんやけどな、ここいらへんむかしは海やったんや」

ざわざわと声がでた。

「大昔のこととちやうんかい」

「五千年前やな。大昔と言うほどやない、縄文時代でもう人も住んでる。海面が今よりずっと高かったころや」

「ははあ」

全員が黙りこんだ。

「これが縄文の海やとして、つまり、どういふことなんかな」

しばらく経って、一人が声を上げた。

「うん、そこやな。どういふことなんか」

郷土史家は、ひとりひとりを見回しながら、最後は自信なげに言った。

「聞きたいのは、わしの方なんやけどな……」

「なんや、偉そうに言うといて、結局分からへんのかいな」

がっかりした声が出て、朝の集会は解散となった。

縄文の海は、近所のあのビルの窓からしか見られないのだった。

都心に勤めている男は、高層のオフィスの窓では変化のない街並みしか見えな

かったと言う。高架駅は水面より上にある。海が見えてもおかしくないはずなのに、工場や住宅が入り組むごみごみした町が見渡せるだけだった。

ただ、雨雲が厚く垂れこめた日のように、街全体が薄暗く沈んでいた。誰も気がつかないようだった。

翌朝も晴れていた。

「縄文期の海というのは、地図でいうたらこんな感じだな」

どこかの本から抜いてきたのか、郷土史家は見慣れない地図を広げていた。現在の地名が重ねて描かれているのだが、東は石切から西の森ノ宮まで、大阪の四分の一を占める東大阪全体が海の中になっていた。

「北にあるのが淀川デルタ、河口の砂州やね。まあ、今ある河口よりだいぶ上流にある」

「南にも川があるな。大和川と書いてあるけど、あれは堺の方、西に流れとんのと違うんか」

「江戸時代に付け替えられるまで、奈良から生駒の南を回って、北向きに流れてたん

や。ここいら辺は低湿地帯で、淀川と大和川が大きいけど、流れ込んでくる河川や沼地なんかがあつて、今みたいな乾いた平野やなかった」

そうすると、ビルの裏側にも大きな川があることになる。北に開いた窓からではよく見えない方角だった。

海は、河内湾と名が付けられていた。

「ほんまの海や。上町台地が岬になつてて、北の先で大阪湾に通じとんのや。この時代やったら大阪の中心街なんか何にもあらへん。堺筋より西にある御堂筋や、梅田、なんばあたりは土地自体がないからな。上町の向こうは、水深二十メートル以上のけっこう深い海や。江戸とか大坂とかは、海が後退してから干拓してできた町やからな。

河内湾は浅いし干潟が多いけど、立派な海や」

「たしかに、この地図の通りに見えるんやけど、それやったらわしらは縄文時代におけるわけか」

「縄文時代って、いやここを降りたらふつうの町やないか。ここだけがなんで縄文時代やねん」

「タイムスリップとちやいますかね」

学生が口を挟んだ。さつきまで、キャンパスに行って仲間と話したのに、誰も関心を向けてくれないと嘆いていた。海を見た者とそうでない者とは、認識の差があるようだった。

「このビルだけが、縄文時代にタイムスリップしたわけですよ」

「なんじゃいそれは」

「別の時代、別の時間に人やモノがふっ飛ばされる現象ですよ」

「それやったら何でここだけやねん」

「ビルがゲートになって、過去と通じるわけですよ。地震があったやないですか。あの力で次元の割れ目ができてですね、その割れ目のキワにこのビルがあると」

わけが分からんという表情で、人々は眉をひそめた。

快晴で海は凧いでいた。風がないためか、海面近くに薄いもやがたち込めていた。

このもやが水面下の薄暗さをつくっているのかもしれない。

生駒山系だけでなく、岬になっている上町台地は緑に覆われていた。北も遠くに山

が見え、水面近くまで灌木類が茂っているようだった。水平線の下になるのでよく見えないが、あれが淀川デルタなのだろう。大阪湾ではなく、いまは河内湾が河口なのだ。現在の門真や寝屋川のあたりかもしれない。遠くにあるのでよく分からなかったが、人工物の痕跡はどこにもない。

平穏な海だった。

見つめるほどに意識が遠ざかる、吸い込まれるような光景だ。茫然とした表情をうかべ、彼らは海を眺めていた。すると、遠くの海面で何か動くものが見えた。

船だった。

ものすごい速さで、船は彼らの眼前まで接近してきた。不思議なことに、白波を蹴立って進んでいるのにエンジン音はしなかった。

大きな船だ。真っ白に塗られ、番号や標識の類いは何もない。曲線を多用した見かけないデザインだった。漁船や貨物船にはみえない。レジャー用途のクルーザーか、富豪が乗るモーターヨットなのだろう。

ただ、マストや無線アンテナ、レーダー、旗竿など、船にあるはずの装備が見当た

らない。前面には窓すらない。操舵室はどこにあるのだろう。

後部の広い甲板には人影があつた。二人いて、リクライニングチェアに腰を下ろしていた。船員ではなく乗客のようだ。速度を緩め、船は滑るようにビルの窓に近づいてきた。

二人は高価そうな服を着ていた。ただ、どこかちぐはぐな感じがした。パーティに行くような派手な服装で、船で着るものとは思えなかった。若そうに見えたが、脱色したのか真っ白な髪を風になびかせていた。

「あんたら何ものや」

一人が声をかけた。

男女は、座ったまま首をかしげるしぐさを見せた。

「どっからきたんや」

男が北側を指さした。

「あっちに何があるねん」

「河口の向こうにピアがあります」

なまりや語尾の不明瞭さもない、よく通る声だった。

「ピアってなんや」

男は戸惑ったように首を振った。なにを訊かれたのか分からないのだろう。

「ピアが分かりませんか。サンバシ、ハトバなら分かりますか」

女がかわりに答えた。

「波止場、波止場があるんかい。おいおい、縄文時代と違うんか」

郷土史家を睨みつけると男が言う。

「ジヨモンはよく分かりませんが、ハトバはあります。わたしたちはそこからリーヤオしているのです」

「リーヤオって……」

郷土史家が遮って訊いた。

「そんなことより、ここはどこなんや。あんたらは知ってるんやろ。教えてくれへんか」

男女は、こちらから少し視線を外した。しばらく間を空けて女が答えた。

「ここは、ハイリカイダーバンデフェイシーです」

郷土史家は怪訝な顔をした。

「何やそれは」

「自然保全地域です。偉大なるダーバン文明を忘れることなく保全するために、自然のまま残された地域なのです」

「タイムスリップじゃないんですか」

学生が叫んだ。

「スリップ……滑落ですか、おもしろい表現をなさいますね。でも、あなた方の時間が地すべりしたわけではありません。むしろ固定されたのです。ほら、見えませんか」
すると、もやがいつの間にか晴れて、透き通った水が現れた。底には何かがあった。

崩れた鉄骨や壁や、建物の残骸らしきものが半ば泥に埋もれていた。

それだけではない。何もないと思っていた水面のあちこちに、残骸に似た岩礁が顔を見せていた。建物の名残なのだ。

一度気がつくくと、あたりにはそんな痕跡が至るところにあった。目を凝らすと、上

町の岬に茂る木々は崩れたビル群の上に生えているようだった。

「ここは遺跡なのですよ。百年前に栄えた文明地域が、大地震とそれに伴う地盤沈下、大規模な津波で滅び、跡地を復元するよりも、保全する決定がなされたのです。まだ水底には、当時の遺物が大量に残されています」

皆は息を呑んだ。

「それやったら、わしらは」

「大地震のエネルギーのせいかもしれませんが、この保全地区には幽霊が現れます」
「ゆうれい」

「超自然的なものというより、自然現象ですね。あなた方は百年前の死んだ瞬間に残留思念となって、土地に焼き付けられたのです」

「しんだ」

「何百万の死者が出て、文明もろとも消滅したなかで、あなた方のケースはとても稀少なのです。保全しただけのikaiがあります」

「ikaiがあるって」

「そのうえで、トゥリーストと遭遇することなど、滅多にありません。お会いできて、わたしたちはたいへん幸運です。ありがとうございます」

「ありがとうって、いわれてもな」

「ご心配はいりません」

二人はにこやかな笑顔を浮かべた。

「あなた方を活性化しているエネルギーは、極めて短期間しか働きません。すぐ尽きて、消えてしまいます」

「消えたらどないなるんや。死んでしまうんか」

悲鳴に似た叫びが数人から漏れた。

「ご心配はいりません」

ふたたび満面の笑みを浮かべて女は言った。

「あなたがたはもう死んでいるのです。単なる焼き付けられた記憶です。二回死ぬことはありません」

「たんなるって」

「この地域は静的に安定しています。記憶を書き換える、動的なメカニズムはないと考えられています。エネルギーが再び蓄積されスレッシュを越えても、今回の記憶は蘇ってこないでしょう。生きていた何日かの同じ日常、同じ記憶を繰り返すだけです」
声はなかった。

そのとき、ここ何日かを思い出した。いつものことなのだから、同じであっても違和感はなかった。けれど、あれは昨日、一昨日とまったく同じだったかもしれない。ここにいる数人だけが海を見た。しかし、仕事場で話した同僚や、友人、見知らぬ大多数の他人たちはもう存在せず、単に過去の数日を再生していただけかもしれない。切れかけの電池で動く機械のように、同じ動作を繰り返しているのだ。

きつと、この百年のあいだは。

「あなたがたとお話しができて、楽しい時間を過ごせました」

ほんのわずかだが、彼らの口の動きと声とがずれていた。どこにもマイクやスピーカーらしきものはなく、声に不自然さはなかったが肉声ではないのだ。

「お名残りおいしいのですが、わたしたちは、これからキートの見物に出かけなければ

なりません。今年はたくさん回遊しているようで、とても嬉しい。これにて、お別れといたします」

だれもキートが何かとは訊かなかった。

船はゆつくりと向きを変え、速度を上げていった。波を切る音だけが聞こえ、あいかわらず動力音はいつさいしなかった。見る間に船影は小さくなっていった。

「あ」

しばらくしてから、だれかが声を上げた。

遠くの水面に、潮がいくつも吹き上がるのが見えた。